

## 古き友を悼む

### 永川玲二の死

永川玲二が死んだという知らせを受けた。知らせを受けたのは五月一日だったが、実際は東京の週貸しマンションの一室で死んでいたのを、死後一週間ぐらいたって発見されたものらしい。死因は虚血性心不全とのことで、医者は、苦しんだのは一分ぐら이었다でしよう、と言っていた由。七十二歳の死は今では早すぎるが、いかにも永川らしい死に方だ、とわたしは受けとめた。

知らせを受けてしばらくぼうとしているうち、これでまた一人古い友達が存在をやめたか、という思いにひたっていた。

古い友達というのはかけがえがない。

永川を知ったのは三十代の初めで、わたしが勤めていた国学院大学に彼が来たのだった。東大英文を出たばかりで、ずいぶん威勢のいいのが来たな、というのが第一印象だった。

当時の国学院外国文学科には、主任教授菊池武一の下に、英語に丸谷才一、仏語に橋本一明、独語にわたしがいて、大学の拡張期だったから、若い教師をどんどんとり、非常に活気があった。覚えていてるだけでも、篠田一士、菅野昭正、清水徹、高松雄一、小田島雄志、安東次男、成瀬駒男、飯島耕一、竹内芳夫、その他みな個性的で鼻っ柱の強いのがかり集っていた。大抵は二、三年いですぐよそに移っていったから、「下士官養成所」と称していたが、その中でも永川はすることが一風も二風も変っていた。

永川と最もよく付合ったのは昭和三十年代で、世田谷上町の安東次男の家でマージャンに熱中したころだった。橋本、成瀬、永川にわたしが上町の周辺に住んでいたので、三日とあげず集ってはマージャンをした。その間にわたしは完全に永川玲二という人間を知った。

永川とわたしはともに山が好きという点が一致していたので、北アルプスや南アルプスなど山にはよく行った。あるとき何のことでか大喧嘩している時に俄雨が来て、仕方なく一人用の狭いツェルトザックに二人してもぐりこんだものの、背中合わせに寝たまま雨が止むまで小一時間もおし黙っていたこともあった。三俣蓮華岳では、夕食用のキャベツを

刻んでいるうち永川が親指を深くざくっと切ってしまい、血が止まらないので、翌朝早く大雨の中をわたしが濡れたツェルトザックから何から全部かついで下山したこともあった。途中あまりに雨がひどいのと、荷が重いのとで岩のくぼみにもぐって休憩中、最後の一本になったマツチ棒を二人して最大の注意をもって発火させることに成功しタバコに火がついたときは、思わず歓声をあげたものだった。

永川が死んだと聞いて脈絡もなくそんな思い出が浮んできたが、近年は彼と会うこともめったになかったので、死んだと聞いても実感は湧かず、そんな思い出のほうが切実なのである。

しかし、永川とつるんでよく遊んだのは六〇年安保ぐらいまでで、六八、九年の大学紛争とともに終わった。永川は勤めていた大学の学生対策に反対して大学を辞め、身一つで、シベリア經由ヨーロッパに渡っていった。初め英国に行ったものの気に入らず、スペインが気に入って、七〇年からはずっとセビーリヤに定着した。完全に日本とは縁切りをしたような按配だった。

向うでは永川宅がヒッピーのたまり場になっていて、いろんな国の若者が永川を慕って集ってくるというような話が、人伝ついでてにきこえてきた。要するにきわめて快適にやっているとということ、自分が親分肌で、国籍を問わず世界中の若者と自由に付合うのが、永川

には大いに気に入っていたのだ。永川の本領はそこにあった、と今もわたしは思う。博識の啓蒙家であり、誰とでも話せる自由なる精神であったのだ。

### セビーリヤの再会

その七〇年代の終りごろ、フランクフルトから列車で何十時間かかけてはるばるセビーリヤまで永川を訪ねていったことがあった。行くと知らせておかなかったので心配だったが、永川はいて、わたしを見て一瞬ギョッとしたように「あなたは、一体……」などと口走ったあと、目を剝いて「え、なんだ、おまえさんか」と、口をあぐり開けて驚くのを見たときは愉快だった。七、八年ぶりの再会だった。

東京に伝わってくる永川の噂は、スペインの山中で山賊みたいに空家で暮しているとか、一月も風呂に入らぬ垢だらけの姿で友人宅に現れ、一時間も風呂に入っていたとか、ろくでもないものばかりだった。が、わたしが訪ねたのは、七、八階建てマンションの中の、三つの寝室、居間、台所、バスつきのゆったりした空間で、へんな臭いがこもっているが、けっしてそんなひどい暮しではなかった。居間の壁一面にヨーロッパ全域の大きな地図が何枚も張ってあって、ここに来る連中の足跡の広さを示していた。

久しぶりに見る永川は、黒々とあごひげをのばし、目が前より八の字型になって、一種



哲学的・瞑想的・東洋隠者的な風貌をしていた。声は相変わらず甲高く、たちまち話は、ヨーロッパにおける金融資本の支配、各国からの移住労働者とその国との関係、若者たちの無差別的交流、ヨーロッパ全体の不可逆的な沈下現象といった話題に及んだ。話からも永川がヨーロッパ中よく旅行し観察しているのがわかった。所有が諸悪の根源であることでは意見が一致した。

二人で話しているあいだにも、何国人だかわからぬ若者が出たり入ったりしていた。

国家の枠組によってでなく、郷土カントリー（住むところ）をもととして、人間や社会やあらゆる物事を見直し、地球上のすべての人間の共存と友愛の可能性を探る。というのが、永川のみならず彼の所に入りするヒッピーたちのディスカッションの主題なのだった。

そういう当時の永川の思索は、七九年に出版された『ことばの政治学』（筑摩書房、今は岩波書店の「同時代ライブラリー」によくあらわれていた。国際語として英語の一語支配は、永川たちの求める文化と政治の多様性を阻害するのである。

おしゃべりが一段落したところで、永川はわたしの案内がてら市場へ買物に出かけた。おそろしくにぎわう市場で、おかみさんたちにまじってじっと自分の順番がくるのを待っている永川の姿は、もうたしかにこの土地の人になっていた。マグロでも蛤でもキロいくらという単位で買うのであった。

それから酒屋へ行って、カウンターで何十種類ものワインを亭主が次々と試飲させるのを、どうこう品評しながらゆっくり飲んでゆく。床はひんやりした土間の昔風の店で、こども永川が土地にいかになじんでいるかがよくわかった。

その晩は、一リットル瓶で何本も買ってきたワインを飲みながら、若者たちもまじってにぎやかな晩餐になった。英語、スペイン語、日本語、ドイツ語、いろんな言葉がとびかいて、ワイワイガヤガヤ、国籍・民族にとらわれぬ友愛的気分を、わたしは堪能した。そして一緒に会話にまじりながら、もしかすると永川は日本人として一つの新しいタイプの生き方を創造しつつあるのではないか、とさえ思った。

### 老いの来たるを知らず

永川が死んだと聞いて、何よりもわたしに思い出されるのは、そういう若者たちの中にいて意気軒昂たる永川の面影だった。当時彼はもう五十歳になっていたはずなのに、老いの到来を自覚するどころか、気分は若者たちと同じなのであった。

そして事実永川は死ぬまで老いということを考えなかったのではないか、と思われる。わたしのほうは永川が日本を去ったところから、もっぱら思いを日本の古典に寄せ、老いを強く自覚するようになっていったのに対し、永川はいくつになっても「老いの来たるを知

らず」というふうだった。

八〇年代のいつか、わたしの妻が友人と共にセビーリヤの永川を訪ねたときは、永川はそれが念願のグアダルキビル川沿いの古い家に住んでいて、非常に御機嫌だった。相変らずその家にもいろんな国の人々が入り込んでいて、永川は彼らとの付き合いで元気だった。妻とその友人にも大変親切にしてくれた、と言っていた。

そのころはセビーリヤの大学で講師をしているとかで、収入もあったのだろう。妻の話聞いてわたしは、永川は結局スペインで死ぬつもりなのだなと推測し、それもまたいいかも永川らしい生き方だと思った。

そのあとか前か定かでないが、その時分のあるときふいに永川が帰って来た。日本で歯を治すために来たとのことで、セビーリヤから陸伝いにアラブ諸国、インド、ビルマを通ってきたという。わたしは世田谷上町の安東次男の家で永川に会った。彼は相変らずトレパン姿で、きのう別れたばかりの友のようにわれわれの前に姿を現し、昔に変わぬ陽気さで話した。が、それがかえって、あれ以後お互いの上になつていった時間と変化を意識させるようだった。安東があきれたように、軽口を叩くひげ面のそんな永川に言った。

「まったくお前も、何年たってもちっとも進歩せんやっちゃんあ。いつまでもそんな風來坊でいて、どうするんや。身をかためるとはいわんが、少しはおのれの年のことを考えて

みい」

「なに言ってるやがる。進歩なんかしてどうなるものか。それより旦那こそ、こんな狭い部屋に閉じこもってないで、ひろい世界を見て見聞をひろめたらどうです。外から相対化して見なけりや、日本もわからないぜ」

こういう乱暴なやりとりは昔と少しも変わらず驚くにあたらないが、ただそこにいまは、それぞれの辿ってきた人生がずっしりと横たわっていて、それが言葉以上にものを言うのだった。二十年近い歳月のあいだに、お互いの生き方はまったく変っていた。定住者と非定住者、ナシヨナリストとコスモポリタン、日本文化と国際感覚、古典と今、等々、話題がひろがるにつれ違いが明らかに一方だった。ただお互いに寄せる親愛の情が変らぬだけである。

そのあと永川は、セビーリヤ定着以来の関心であるイスラム文化の西漸史の一端として、『アンダルシア風土記』（岩波書店）を、一九九九年七月に出した。永川玲二という男の調査の徹底性、博搜、文化史的目くばりのたしさが遺憾なくあらわれた、周到厚重な著作であった。雑誌『世界』に連載中からわたしは読んでいたが、一九七〇年以来約三十年、日本の空気を吸っていなかった人間の日本語はやはりどこか違っている、と思わないわけにいかなかった。どこがどうと指摘できないが、書き手と読者とがじかにつながっている

感じが薄いのである。

しかしそれを彼が毎月書いているころは、彼とのあいだに連絡が途絶えていた。人の噂に、定年でセビーリヤの大学をやめ、九州の某大学の講師をしているなどと聞いたけれども、彼からの連絡はなかった。出版社の手帳の人名簿には相変らずセビーリヤの住所がのっていた。

わたしは、永川のことだ、落着いたら何か言ってくるだろう、と思つてゆっくり構えているうち、とつぜん五月一日に永川の死、しかも東京の週貸しマンションの一室で死んでいたという通知を受けたのである。死ぬ前に新しく出す本のゲラを見ていたというから、そのために上京していたのかもしれない。

死は誰にでも必ず来る。死が来ること自体は別に驚くべきことではない。一人の人間の生涯は、生きているあいだのことだけだ。永川が存在を止めたと聞いて、わたしの脳裡に最も鮮明に浮ぶのは、セビーリヤに彼を訪ねていったときの彼の姿だった。魚が水を得たようにという、そのとおりに生き生きして、自分の本領にある自信にみちた永川玲二がそこにいた。あの彼の人格の影響力にくらべれば、永川の書き遺したものはまだその魅力を十全には伝えていない、と思われる。

人の生涯には必ず時代と息が合う時と合わぬ時とがあるという。永川玲二の時は、一九

七〇、八〇年代の二十年間、冷戦下に若者たちが新しい時代の可能性を求めている時であった。